

「海洋センターは、地域行政を活性化させる 拠点になり得ます」

「B & Gセンター育成士」を経て首長に
なった、青森県名川町の工藤祐直 町長



工藤祐直 町長は、大学を出て民間企業に勤めた後、故郷の町役場に再就職。社会体育の担当としてセンター育成士（現：アドバンスト・インストラクター）の資格を取得し、地元B & G名川町海洋センターの運営に力を注いだ。

「どの地域海洋センターにも言えることでしょうか、スタッフとなった職員は、勤務時間が不規則になるなど不満も出てくると思います。しかし、見方を変えれば、行政職員としてこれほど住民とふれあうことができる部署はほかにありません。ここでの勤務経験は、かならず後で役に立つはずだと思います」

工藤町長自身、地域海洋センター勤務時代に多くの住民と交流したことで、町の行政に対する強い関心が芽生えたという。いまから8年前、保育園の時間延長など、さまざまな改革案を掲げて町長選に出馬した際には、地域海洋センターで親しくなった住民たちが応援に駆けつけてくれた。今回は、かつてセンター育成士として活躍した工藤町長に、地域海洋センターが担う役割や、行政職員として、そこで働くことの意義などについてお話を伺った。

研修後、事業を倍に拡大

高校までは野球、大学では少林寺拳法とスポーツでならした工藤町長。それだけに、民間企業から町役場へ転職した際も、社会教育の部署で体育担当となった。当時、名川町では待望の地域海洋センター（以下、海洋センター）が完成。職員の誰かがセンター育成士の研修を受けなければならない、まっさきにスポーツマンの新人職員、工藤青年に白羽の矢が当てられた。

「その頃の研修は3カ月間のプログラムで、私は苦手だった水泳の試験をクリアするのに、かなり苦労しました」

研修中は水泳の練習が辛く、一刻も早く郷里に帰りたいと思ったそうだが、3カ月間、同じ釜の飯を食べた同期生はもとより、厳しかった教官さえとも熱い友情が芽生えたという。

「研修に参加したおかげで、全国各地に親友ができました。彼らとは、いまでも出張などで近くに出向いた際には、一献酌み交わしながら情報交換をしています」

研修から帰ると、新人職員ながら完成したばかりの海洋センターを任された。

「期待されて研修に行ったわけですから、海洋センターを任されたときは、そのようなプレッシャーを感じました。職員も住民も、あの厳しいB&G財団の研修を乗り越えてきた人間だという目で私を見るわけです。しかし、そんなプレッシャーを跳ね返すだけの研修をしてくださいましたから、重荷を感じながらも不安はありませんでした」

現在は、担当職員に研修を命じる立場の工藤町長。毎年、彼らに対しては「なにか1つだけでいいから、しっかり身に付けてこい」と言って送り出しているという。なにもかも、すべてを吸収しようとするれば無理が生じ、そのことが地元へ戻ったときに不必要なプレッシャーとなって降り掛かるからだという。経験者だからこそ、適切なアドバイスと言えよう。

さて、海洋センターを任された工藤青年は、研修で学んだノウハウをフルに活用。それまで町が行っていた社会体育事業の数を、一気に倍にまで拡大した。

「それまでは、どちらかといえば成人対象のメニューに偏りがちでした。一方、研修では子供を主体としたメニューを学ぶことができましたから、それを推し進めることで事業の数が倍になったのです」

活気にあふれる海洋センター。そんな姿を見て、地元の小学校から水泳の授業を海洋センターに委託したいという話も舞い込んだ。

「いまでこそ、このようなケースもありますが、当時は学校の教員以外が子供の水泳を指導するなんてことは、ほとんど考えられませんでした。私自身、水泳は得意ではありませんでしたが、それでも小学校の申し入れを受け、1、2年生の水泳を指導することになりました」

この委託事業は、20年ほど経ったいまでも海洋センターで続けられている。工藤町長が指導した子供たちの多くは、現在、社会人となって町を支えており、最近では「私が小学生だったとき、町長からゲンコツをもらったことがありますよ」などと声を掛けられることもあるという。

いまの職場を最高だと思え！

今年9月、工藤町長は沖縄で行われたアドバンスト・インストラクターの養成研修にゲストとして招かれ、全国から集まった26名の研修生を前に講演を行った。標題は、「いまの職場を最高だと思え」。工藤町長は自らの経験を基に、これから地元へ帰って海洋センターを任されたり、社会教育、社会福祉等の部署で働く後輩たちに、さまざまなアドバイスを語ったが、この標題そのものが講演のキーワードとなっていた。

どの海洋センターにも言えることでしょうが、スタッフとなった職員には、勤務時間が不規則になるなど、さまざまな不満が出てきます。私にしても、町役場に採用されたときは、4時半になったら帰宅できると思っていましたからね。



「いまの職場を最高だと思え」と、研修生を励ます工藤町長

ところが、海洋センターの仕事というものは、そういう訳にはいきません。毎日9時間以上働き、土日ありませんでした。そうしたなかで、『なぜ自分たちだけが、こんな目に遭うのか？』といった疑問が出てきても不思議ではありません。しかし、確かに仕事はハードなのですが、積極的にそれを受け入れてみると、実にやりがいを感じてくるのです。私は、センター育成士となってから5年間ほど海洋センターの仕事を受け持ちましたが、この間の仕事は、とても充実していました」

工藤町長の現役時代には、教室やイベントが終わった後には、かならず同僚たちが1,000円ずつ出し合って反省会兼慰労会を設けたという。この席での分かち合いが疲れを忘れさせ、仕事の喜びを倍にしてくれたそうである。

「幹事なんて、誰でもいいのです。職場のリーダーが取りまとめなければならないものではありません。1人がなんでもしていたら疲れてしまい、億劫になっていくだけですから、できる人をお願いすればいいのです」

アドバンスト・インストラクターは職場でのリーダー的存在になるが、だからこそ、人に任せる部分と自分が率先して行う部分を上手に使い分けしていくべきだと言う。そのなかで、さりげないことではあるが反省会兼慰労会といったもので志気を高めていく工夫も求められていく。

「私は、民間企業から役場に転職したこともあって、公務員の恵まれた環境をよく理解しているつもりです。ノルマもなければ、リストラもない。不景気だからといって、ボーナスがまったく支給されないなどということもないのです。そのことを考えてみれば、海洋センターの勤務時間が不規則になるぐらい、なんともありません。逆に、直に住民と接する仕事ですから、それだけにやりがいがあり、公務員として自分はなにをすべきかといったことが数多く学べます。その経験は、後々どんな部署へ異動になっても、かならず役に立つことでしょう。だからこそ、研修生のみなさんに、『いまの職場が最高だと思え』と述べたのです。また、『与えられた職場が、自分でないとできない仕事と思え』とも言いましたが、海洋センターを任される社会教育／体育や保健福祉などの担当者は、直に住民と接してハードに働く訳ですから、それぐらいの自負心を持ってしかるべきなのです。赴任中は、住民の多くと仲良くなれるチャンスなのですから、おおいに仕事に励んでいただきたいと思います」

工藤町長は、ひとつの例を挙げてくれた。それは、町内のある狭い通りからすべての電柱を撤去し、電線を地下に埋めようとした時の話である。電柱を撤去すれば道幅が広がるが、電線を地下に埋めるためには、通り沿いの家の敷地を使うしかない。本来、その陳情は土木課の仕事だったが、工藤町長は町内会長にお願いした。

「突然、顔も知らない役人が訪れて陳情したら、家の人にとっては抵抗があるでしょう。しかし、顔見知りの町内会長からお願いされたら、話は別です」

こうした発想は、いつも住民と接しているところから生まれるものであろう。8年前、さまざまな改革案を掲げて選挙に出馬した工藤町長だが、その1つであった保育園の時間延長なども、海洋センター時代の経験から得た住民のニーズだった。選挙の際には、海洋センターで親しくなった住民の多くが応援に駆けつけてくれ、本庁勤務の経験しかなかったら得ることのできない人の輪の力を授かった。



活動が沈滞化している海洋センターは、
他の海洋センターと交流してみよう！

B & G 名川町海洋センターは、工藤町長が在籍していた時代から岩手県の B & G 山田町海洋センターとの交流が続けられている。

「名川町には海がないため、海に面した山田町の海洋センターにお願いして、毎年、夏休みに子供たちを連れて行ってカヌーなどを体験させています。子供たちの交流もさることながら、双方の指導員が一緒になって教えるため、おたがいに良い勉強になっています」

熱心な活動で知られる B & G 山田町海洋センター。そこを訪れることで、自分たちの町の海洋センターも頑張らねばという気持ちになるという。

「ときどき、他の海洋センター関係者と話す機会がありますが、勤務体系などで不満をこぼすところは、活動自体も活発ではないようです。結局は、スタッフのやる気の問題になってきますが、活動の沈滞化で悩んでいるところは、一度、他の海洋センターと交流してみると良いと思います。いままで気がつかなかった部分を知ることができ、さまざまな活動のヒントが得られます」

今年のアドバンスト・インストラクター養成研修では、名川町から福祉課の米内 聡さんが参加していたが、これには大きな意味があるのだという。

「これまで、福祉課や保健課などと海洋センターは、別々に機能していましたが、今後、住民の健康増進や高齢化の問題を考えた場合、おたがいの連携が不可欠になっていくからです。これらの課が企画し、指導は海洋センターが受け持つというパターンが、おそらく全国的に見られるようになると思います」

今年のアドバンスト・インストラクター養成研修に参加した人たちに、なにが一番印象的な講義だったかと質問したところ、大半は高齢者向けの「転倒・寝たきり予防プログラム指導者実践セミナー」を挙げていた。高齢者対策は、どの自治体にとっても大きな課題である。そうした時代の流れを汲むなかで、ますます海洋センターの利用価値に注目が集まっていると言えよう。

「ことなかれ主義的な発想で海洋センターを考えたら、宝の持ち腐れです。

ここは、住民と行政が直にふれあうことができる貴重な施設なのだという意識を持たねばなりません。海洋センターは、地域コミュニティ活性化の拠点となり得るのです」

今年の研修に名川町から参加した福祉課の米内さんは、小学生のとき海洋センターで水泳を教えてくれた工藤町長のことを、いまでも良く覚えているという。20年前、新米のセンター育成士によって活動が開始されたB & G名川町海洋センターは、確実に地域コミュニティとしての成果を歴史に刻んでいるのである。

ちなみに、米内さんは今年4月から半年間、B & G財団に出向。海洋センター情報のデータベース化やホームページの作成などを受け持つ、ネットワーク推進部情報課に所属しながら、さまざまな財団活動に携わり、各種研修も受講した。そのおもな内容は、

- ・ アドバンスト・インストラクター資格取得
- ・ 2級小型船舶操縦士資格取得
- ・ 海洋体験セミナーの運営
- ・ 水辺の活動推進セミナー等の指導補助
- ・ 全国スポーツ大会の企画運営
- ・ パソコン研修

等々。

B & G財団では、人的ネットワーク推進の一環として、今年から地方自治体職員の出向を受け入れており、すでに米内さんをはじめ3名が半年間の出向業務を体験している。今後、さまざまな自治体職員が財団業務を体験することで、地域海洋センターの活動が、より一層活発化していくことが期待されている。